

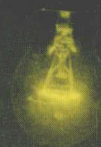
おん

ど

怨怒の民

紙野柳蔵著

—カネミ油症患者の記録—



教文館

怨怒の民

おん

ど

紙野柳蔵著

カネミ油症患者の記録

怨怒の民

カネミ油症患者の記録

¥ 980

昭和48年7月30日発行

著者 紙野柳蔵

発行者 武藤富男

発行所 株式会社 教文館

東京都中央区銀座 4—5—1 振替・東京11357 電話・代表(561)8446

印刷所 安信印刷工業株式会社

製本所 協立製本株式会社

配給元 日キ販 東京都新宿区新小川町3—1 振替東京・60976 電話(260)5664 (代)
0036—662050—6100 (日キ販)

© Ryuzo Kamino 1973 落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

ま え が き

敗戦の捨て子である原爆患者と繁栄の捨て子公害患者が、繁栄社会に対して、昨日も今日も悲しみと呻きと呪いを秘めて叫んでいる。これらの人々は不義の落とし子だろうか？ この子らを孕んでいた日本の国という母体は情け知らずの薄情ものだった。

もともと情け知らずのこの母は第二次大戦でも自分が栄えるために、多くの子を欺いてどれだけ多くの血を流したかわからない。多くの孤児や、夫なきやもめをつくった。またその血によって繁栄という食欲に身を委ねて多くの公害という片輪を産み、ごみ捨て場に捨てていく。

この薄情な母体は早く殺すか解体したほうがよいような気がする。しかしカイザルのものはカイザルのもの（マタイ二二・二一）、としたほうがよい。

この母体はいろいろな子を孕んだ。血に染まって負け、首を突っ込んでいる鶏を突つつくように弱い兄弟たちを突つつきまわす、薄情な兄弟たちの苛酷な行為にもまなざしをむけたまま。しかしそれは父なる神の御心ではない。

わたしはカネミライスオイル中毒患者である。カネミ製油による塩化ジフェニールが体内でわたしを苦しめている。わたしの家族は全員油症患者であるが、わたしたちのような患者が千人以上いる。

この患者たちも一昨年六月三〇日に富山のイタイイタイ病患者や一昨年九月二九日新潟第二水俣病患者が裁判で勝訴したように、勝訴をめざして裁判闘争をしている。

だが裁判が最後の勝利であるだろうか。

九月二九日結審判決の日、多くの支援する団体や人々により「勝利」のかちどきがあげられたが、別に患者たちの中に「百万円紙幣一枚か五枚でわたしたちは救われない。死んだ人も帰らない。痛みはとれない」と泣いて悲しんでいる人がいた。この患者たちの孤独な人生の旅路は続くだろう。あのときの勝利の凱歌はなんだろうか。物質の勝利と人間敗北の哀歌が歌われていた。

日本の多くの兄弟たちよ、わたしもカネミ運動に立った。だがわたしは裁判が決して最終の目的ではあってはならないし、政治のための運動や、加害企業対住民運動では決してあってはならないと思う。わたしたちははじめ政治的解決に依存した。しかし過去の累積の上に権力の砦を築いている保守政党や政治家たちが公害被害者たちに与えたものは、いったいなんだったろうか。革新政党の人たちが公害問題に取り組んだが、被害者の存在とは保守勢力に対する公害としての題材の一部でしかなかった。このことを公害被害者および原爆被害者は知り過ぎるほど知っている。

わたしたちの命は政治運動や、社会運動の題材ではない。「あなたの命も、わたしの命もたいせつだ」「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」(マタイ一六・二六)。この生命の闘いである。これを犯すものに對する闘いである。

だがわたしたちの運動は社会的現象のみに捉われてその本質を逸脱している。これこそ、生命の戦いが手段に替えられている悲しむべき現状である。そこでわたしはカネミ運動の中から、ありのままを書いた。同じ運命の衣に包まれた兄弟姉妹にそのまま登場してもらった。

同じ日本という国に、同じ時間の中に生を受けた兄弟姉妹であるべきはずの人々が、全く各個ばらばらで、なぜ憎まねばならないか。聖書にはシロアムの塔が倒れて下敷きになって死んだ一八人の人は、その人の罪ではなく、全イスラエルの人々の悔い改めを求められた(ルカ一三・四)と書かれている。シロアムの塔が物理的に倒れたことによる死、それ自体が罪の結果であるのではなく、塔の社会的な意味と歴史的な背景の深部にある罪の根元に触れられているのである。

また被害者たちの闘いの原動力は「怨」をもってしてはならない。公害も「わからないもの」の罪である。そのためイエス・キリストは、わからない人たちのために血の汗を流して祈りたもうた。人生のエリコ街道(ルカ一〇・三〇―三七)で傷ついて倒れているのは、わたしだけではあるまい。

公害の闘いは命の闘いである。パリサイびとたちのような教条主義や組織の中への没入や、ヘロデのような政治権力者の庇護の中には救いはない。自分の命を救おうとするものはそれを失うだろう。ただ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れるほか、だれも恐れてはならない。

わたしはこのカネミの運動中、岩本二郎先生からカネミの問題を書いてみてはどうかとおすすめをいただいたことがきっかけとなり本書を執筆するに致し、また言い尽くすことができないほどのいろいろなかたたちのご支援を受け、祈りに支えられて本書が完成したことを感謝いたします。今後の公害運動のあり方に対する一助となり得れば幸いです。

目 次

まえがき

I 運命が待っていた……九

- | | |
|---|-------------------|
| 1 | わたしの生がわたしを苦しめる……二 |
| 2 | 孤独・神の沈黙・欠乏との戦い……四 |
| 3 | はじめて奇病わかる……六 |
| 4 | 医者に医者がほしい……二 |
| 5 | 出せ！ イボの顔を……二四 |
| 6 | プクッと証拠のアワ……三〇 |
| 7 | なんという冷血人間か！……三三 |
| 8 | だれが愛しうるのか？……四〇 |
| 9 | ハダカになった娘……四四 |

- 11 あなたがたは、どうしようというのか？……五二
- 10 誠意ある回答がほしい……四七
- 12 会社は偽装の怪物……六〇
- 13 堅められた会社の牙城……五五
- 14 患者がいただく望みの綱とは？……五七
- 15 ことばだけが誠意じゃない……六二
- 16 飼い馴らされた傀儡社員……六九
- 17 組織は人間をどうするのか？……一〇七
- II 社会と人間……一二三
- III 空文化される請願・陳情……一二七
- 1 血を吸った赤いじゅうたん……一三九
- 2 権力に求める慰れみは無意味……一三八
- 3 梨（無し）の礫……一四二

4 ここで正月を越させてください……一五〇

IV 医学と人間……一五九

1 医者の非人間性……一六二

2 人間でありたい……一六三

3 幻を求めて消えて行け！……一六六

4 病める人は医者から去った……一七〇

5 古い着物に新しい布ぎれ……一七七

6 医学と人間疎外……一八二

V 死ぬ前に死がある……一八七

1 犯人なき大量殺人……一九九

2 しかし、悲しみは存在する……一九三

3 このまま葬られてなるものか！……二〇三

- 4 もっとも熱心な心と心とが離れて行く……二〇八
- 5 わたしの苦しみを食べてみよ！……二二
- 6 神さま、助けてください！……二九
- 7 組織は幻か？ 現実か？……三六
- 8 怪文書は踊る……三八
- 9 虐げられた者の相剋……四七
- 10 怨みの闘争に勝利があるか？……五九
- 11 わたしのはわたしのものか？……六九
- 12 俺は死にたい、安らかに死にたい……七九
- 13 科学は人間をつくれない……八九
- 14 良心とはなんだろうか？……九三
- 15 相対的人格は消滅しろ！……九九
- あとがき……三五

I 運命が待っていた

罪惡感の不徹底な所に

人間性の墜落

社会道德の麻痺がある

さまよう人間の生

血のうめき 孤独

生のささえが失われたとき

他律化の道を行くか？

そこは 天国もなく 地獄もなく

平坦な他律的画一化がある

公害は人間の生をどこに運ぼうとするか？

1 わたしの生がわたしを苦しめる

人間は間近な未来さえ知らない。われわれの前に横たわっているものは、あまりにも空虚で、あまりにも暗く、あまりにも深く、底がない。われわれの未来は、うつろな目でわれわれを眺めていたのではなかっただろうか。

わたしたちの目ざして進む世界は信頼に足るものであり、有望であると考えられている。自己の人生計画は無限に継続されるもののように考えられていた。

四三年三月だった。長男はかねてから春休みをアルバイトに当てようと計画していた。いく冊かの本の購入費を得るためであった。妻は命の補給源である食物には特に意を注いだ。特に脂肪分や蛋白分は若いものには必要だと思い込んでいる妻

は、油でテン普拉やいためものを食べさせて元気づけようとした。弁当のおかずにはさえ油物を持たせた。だがアルバイトの一日目、長男は全くくたくたに疲れて、弁当さえ食べずに帰って来た。二日目の朝はまぶたが特にはれあがり顔全体がむくんでいった。手足もいく分かはれて掌を握るのにかたいと言う。それでも学友にさそわれて、どうにか六日続いたが、七日目の朝は起きられない。目まいがし胸がくるしいと言う。せつかくの春休みの友だちといっしょのアルバイトも挫折してしまった。このときまで、大学を卒業しても社会人として巣立つことができなくなるなどとだれが予想しえようか。まさか母が毎日毒物を自分の子どもに食わせているなんて、夢にも考えられないことである。それから毎日医者通いがはじまった。

同じ症状が家族の者に次から次へ現われた。妻もわたしも頭が痛む。手足まで痛み出した。妻は更年期障害であろうと言うし、わたしも神経痛が

出たと思つた。人にすすめられて漢方薬のサイシンがよく効くというので、野生のサイシンを山に採取に行った。山の中腹までどうにか登つたころ、わたしの右足の股のつけ根に激痛がきて一歩も歩けなくなつた、わたしは棒立ちになつたまま痛いところを揉みほぐそうとして揉みはじめたが、揉むほど痛くなつた。サイシン探しに妻と離ればなれであつたので、大声で呼んだが返事がない。わたしは不安になつた。山をおりるよりほかない。動こうとしても動けない。

わたしは両手をつき、後ろ向きにあとずさりで山をおりはじめた。あまり静かになつたわたしを探しに来て、妻も驚いていた。ようやく妻の肩に手をかけ、一方に杖をつき痛みに耐えながら帰宅した。

その夜からトイレに行くのも這って行かねばならない。妻も次女も長男と同じ症状が出た。家族全員医者通いはじまつた。どこの病院に行つて

苦しみを訴えてもわからない。五月のはじめから目が痛みだした。眼球は赤くなつた。家族のうちでも最もわたしが悪く、ふた晩くらい眠られずに氷で冷やした。医者に行つてもよくならない。医師は結膜炎と言つたり白内症だと言つたりした。これも家族全員である。

わたしの家から三〇〇メートルくらい南に位置した所に縫製工場がある。毎日化繊の切り屑を工場の庭で露出焼却するので、風に運ばれ煙が流れてくる。これが目の悪くなつた原因ではないかと、風しもの家も調査したところ約三四、五人が目の悪いことがわかつた。そこでわたしは町役場の民生課に申し出て焼却をやめてもらうように依頼すると同時に、添田町保健所にも調査するように依頼した。町立病院でも、わたしたちの目を普通の結膜炎でないと言ひ出したが、鼻をさすような悪臭と目にしみるような化繊焼却はやめなさい。わたしは隣組長にも相談して隣組として強固な抗

議をして、ようやく露出化粧屑焼却は中止された。

ところがほかの人たちはよくなったが、四軒の人だけどうしてもよくなかない。四軒とは近所に嫁に行っている長女一家四人と、森一家と高橋一家とわたしの家族である。しかし娘一家は別な病状がわたしの一家と同じ時期に出たが、他の家族はそうでない。六月の終わりには長女と次女の顔からからだ全体、足の裏まで奇怪な吹き出物が出はじめ、一日一日悪化して化け物のようになった。痛さと痒さに娘たちの眠られぬ日が続き出した。全く人間の顔のようではなくなった。娘たちは変わりいく顔を鏡に写して泣き悲しんだ。鏡の前に行くのが恐ろしいと言う。自分自身を愛してきた、自分自身で立ち得ると思ってきた人間は皆そうなるだろうか。娘たちは洗面するにも両手に水を入れて、手で顔を洗うのではなく、手に水を溜め静かに顔をもって行く。髪の毛は油気はなくな

り棕櫚のように赤くなった。髪に差しているピンもすぐに錆びる。髪の毛が顔に当たっても痛いと言う。吹き出物の一つ一つに脂肪が溜まる。押せばズグウツズグウツと音がして出る悪臭が家中にただよう。どこの医者に診断してもらってもわからない。吐き気がする。目まいがする。あるときは歩行中気が遠くなりどこかに吸い込まれて行くようになった。そんなとき倒れる恐怖にかられて歩行をとめてたらずむ。七月ころからは魚も肉も食べたくなくなり、特に油物を見るのもいやになった。食べたものを吐く。からだ全体が悪寒に襲われるときがある。昼ま家に居てもいつもごろごろ横になり、足を壁に登らせねば足がだるくて置き場がないようだ。わたしの生がわたしを苦しめる。

2 孤独・神の沈黙・欠乏との戦い

四三年七月だった。次女は倉敷に三週間の予定で縫製技術の見習いに行ったが、一週間で幽霊のように、よろめくようにして帰って来た。そして玄関に倒れるようにしてからだを横たえた。相당한衰弱である。それからというものは、少しも家から出ようとしない。医者に行くにも妻に連れられて顔を隠して行く。汽車に乗るにもいちばん片隅に新聞紙かハンカチで顔を隠して座る。妻はいつもその前に立っていた。そのように隠れているのに、人々の目は怪物でも見るように集中する。長女は買い物から帰ると崩れるように座り、

「わたしのからだに目がくっついてゐるのを払いのけたい。わたしにくっついてゐる目がわたしには耐えられない」

と言う。一日一日やせほそってゆく。長女は一八キロ、妻が一三キロ、わたしが一〇キロ、次女、長男もやせた。血圧は下る。今まで来ていた人たちも寄りつかなくなった。近所の人たちの間にも、

「あなたはあちらの家にいかないほうがよいですよ、伝染しますよ。あなたたちはおそろしくないの」

と言い伝えられていると聞く。わたしたちはほんとうに遺伝だろうか、伝染病だろうか。妻や娘たちの差しているピンも錆びる。長女がたまに使う編物機も、次女が手にするハサミも、ミシンも錆びてゆく。洗面するたびに口に流し込む水は塩っぱい。皮膚の表面に吹き出す白いざらざらした塩分。いったいわたしたちのからだはなんなのか。

わたしたちは七年間アメリカの宣教師、R・G・ジェニー先生を迎え、毎月二回、日曜日に礼拝